

第二章

我が職場



世直し共闘

—ある職場闘争の記録—

登場人物

- 「老」女教師
- A 教務主任・男(Cの後任)
B 教諭・男
C 教務主任・男
D 教諭・男
E 学童擁護主事・女
F 教頭・男(Sの後任)
G 教諭・女
H 教諭・男
I 用務主事・男
J 校長・男(Kの後任)
K 校長・男
生活指導主任・男
- PTA会長・男
- L 校長・男(Kの前任)
M 用務主事・男
N 警備主事・男
O 教諭・女
P 用務主事・女
Q 教諭・男
R 教諭・男
S 教頭・男
T 教諭・男
Y 中央区職労執行委員・男
元PTA会長・男
- 私

連載

世直し共闘

(第一回)

酒井雅親



1 それは一枚のビラで始まった

その「闘い」は、一九七九年一月八日のビラから始まる。阪本小学校から中央区の全校に配られたビラの見出しには「阪本の職場を明るくするために私たちは起ちあがりませう」とあった。発行人は「阪本世直し共闘会議」、代表責任者は警備主事のNと私。

ビラの効果は、発行人も驚くほどで、たちまち区内の学校中に知れわたり、区教委にも噂が飛び交ったという。特に校長・教頭クラスのこの事件への関心度は高く、K校長と対立する派閥の管理職などは、内心ほくそえんでいたと聞く。

K校長——一九七七年四月阪本小学校着任、八三年三月同校で退職。阪本小の前は目黒区指導室長。私が江戸川区にいた頃(六八―七一年)は江戸川区の指導主事をやっており「酒井さんのことはよく知っていましたよ。

派手にいろいろやっていたからね」と語っていた(その頃私は「江教組を強くする会」という「反戦派」の代表世話人をしていた)。教頭を経験しないで四七歳で校長になったという出世畑。妻も豊島区の校長をしたというおしどり校長夫婦。

表情は一見柔和。静かな語り口。着任早々の職員への第一声は「校長というものは空気みたいな存在ですから、みなさんは自由に教育活動に励んで下さい」であった。

平和な一年が過ぎる。事実、この一年、彼は「空気」のように振る舞っていた。職員もみな「やさしい校長先生、さすがは指導室長をやっていただけのことはある」と、歓迎ムードでいっぱいだった。

だが、彼は一年間、ただひとり鋭い眼を光らせていたのだ。七八年四月から、それは開始される。

これから五年、疑心暗鬼が渦巻く中、阪本小の歴史に残る「闘い」が静かに、そして公然と始まるのである。

2 目頭を押さえる教師たち



一九七八年四月から、K校長の「職員いびり作戦」は開始された。

この当時、阪本小の校内連絡は職員室と各教室を結ぶだけの古い電話機を使用していたので、彼は校長室から職員室に来て教員を呼び出さなければならなかったのであるが、K校長は、まるで楽しむかのように連日それを行ったのである。しかも授業中に――。

「〇〇先生、ちよっと校長室に来て下さい」。九名の都教組組合員（組織率は五割で、中央区の中では高い）が次々に呼び出される。

阪本小に事務室ができるのは八三年四月であり、当然のことながら私は職員室で執務していた。したがって、この動きがいやが上にも眼に入ってくるのである。

◇ ◇

校長室で、呼び出された教員と校長とのあいだにどんな会話が交わされていたか。

あとで聞くところによると、彼は主に、当該教員の学級経営上の欠点をあげつらったようである。自分の経営方針に合わない部分を穿り出そうと思えば、いくらでもできる。また、教員だれしも指導上の未熟な点は少しは抱えているものである。しかし彼は、そこを徹底的に突いて責めたてた。穏やかな口調ではあるのだが、もともと性格が「陰性」のために、それは執拗な「いびり」となる。彼は最後に必ず「こう結んだそつである。」「結局、あなたはこの学校に向いていない」――。

密室での会談を終えて出てくる教員の顔は一樣に暗く、
目頭を押さへながら教室に向かう女性教師の姿を、私は
しばしば見かけるようになった。

◇ ◇

そして、この年、予期せぬ不幸な事件が起こるのであ
る。

3 「老」女教師の辞職



一九七八年六月、一年生の児童が鉄棒から落ちた。高
さ一メートルほどの低鉄棒であったのだが、打ちどころ
が悪かった。都心の校庭は砂地ではない。この子は一時、
生死をさまよった。

K校長は、保護者への詫びや入院見舞い、区教委への
報告やらで多忙な日々を送る。児童はまもなく快方に向
かったが、担任の女教師は毎日のように校長室に呼びつ
けられて「査問」を受けた。

彼女は当時五七歳。肥り気味で日頃から体調がおもわ

しい方ではなかったが、この「査問」を受けるたびに白
髪が増え、ヨロヨロと歩くようになった。出勤の途中で
私と顔を合わせると、「毎朝、きょうも学校に行かなけ
ればならないかと思うと、つらい」と漏らした。

◇ ◇

その後も、彼女に対する校長の「取り調べ」は続けら
れ、女教師は日を追うことに衰弱していった。同学年で
担任を持っていた男性教師も立ち会わされ、彼女の当該
児童に対する「看護」が適切であったか否かが試された。
彼女と同じ都教組の組合員であったこの若い教師は、事
実をありのままに証言した。事故当時、彼女はきちんと
任務を果たしていた、と。

そのことがまた、校長の逆鱗に触れることとなった。

Kは、事故が不慮の災害であったと結論づけることをで
きるだけ避けようとした。すべてが彼女の責任、彼女を
頂点とする都教組の組合員が日頃からこんなズサンな児
童管理しかしていないのだ、ということの一部の父母に
印象づけたかったのではないか——、のちに周囲の人た

ちが語った感想である。

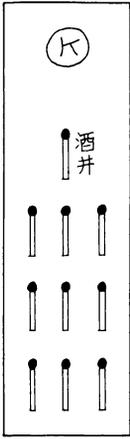
一九七九年三月末、女教師は老いて退職した。共済組合で、退職年金の手続きを無事終えたところで、彼女は深々と私に頭を下げた。「酒井さん、阪本のおとを、よろしくお願いします——」。

4 失敗した「謀議」



「老」女教師が校長の「取り調べ」を受けていた七八年七月の夏休みに入る直前のある日、日本橋の喫茶店に都教組の組合員全員（九名）と私が集まった。私が要請しての会合だった。

（二）で私は、二学期から反撃を開始しよう、その際の戦陣は次のように張ろうではないか、とマツチ棒で提案



した。つまり、私が前面に出る、教組の組合員は

それぞれの力量に応じて散らばり、前衛隊が後退してき

ても、後から支えて頑張ろうではないか、と。

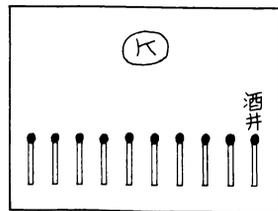
しかし、彼等は首をタテに振らなかった。「酒井さんも一緒に、みんな並んで対処しましょうよ」とマツチ棒を並べ変えた。「それではうしろは断崖絶壁だ。一緒に落ちたらおしまいだよ」という私の意見は通らず、この日の「謀議」は失敗に終わったのである。

◇ ◇

二学期は、無為に過ぎていった。「老」女教師が衰弱していった時季でもある。

もともと阪本小分会は、共産党色の強い都教組中央支部の中では珍しく、色々のない普通の分会だった。組合員の父母への受けもよく、これがのちの「父母分裂」の際の一方の柱にもなる。

しかし、その優しさが（二）では裏目に出た。分会は、阪本小で起こっている事態を支部に報告もしていなかった。校長にいびられた事柄を聞き出そうとする私に対し、



彼等は次第に口をつぐむようになった。私はひとり苛立ちながら悶々としていた。この時点で、組合員の大半が異動希望を出していたことを、私は知らなかった。

◇ ◇

だが、K校長の「魔の手」がついに現業職員にまで伸びるに及んで、私の怒りは爆発した。一九七九年初頭、私は自ら堪忍袋の緒を切った。(ここに、「阪本世直し共闘会議」は、慌ただしく成立するのである。

5 堪忍袋の緒を切った



阪本の職場を明るくするために
私たちは起ちあがります。

あけましておめでとつ(ご)います。

とは言っても、なかなかいい年が明けなかった、
というのが阪本小なつびに幼稚園に勤務するみなさん

んの偽らざる心境ではなからうかと思えます。新年早々、このような宣言文を出さざるを得なくなったことを、私たちは非常に残念に思っています。しかし、正直言って、これ以上沈黙することは許されなくなりました。

年末にあった校長の問題発言

年末、K校長と主事(正確には一般用務と学童擁護)とのあいだで、次のような「事件」が起っています。

① 六〇歳を超えた者に対する退職勧奨を行った際、K校長が勧奨を受ける者にとって大変ショックになるような言辞を吐いていること。あるいは勧奨とは直接関係のないことまで持ち出していること。

② 12月20日の校長と主事との話し合い(S教頭が「友好的な話し合いをした」と朝の打ち合わせで発言したあれ)の中で、「お茶を飲む時間が長すぎる。先生方がそう言っている」等の発言を行ったこと。

③ 同じ場で、正門を開け、ボックスみたいなものを置いて、主事に交代で受付(＝門番)をさせることを来年度から実施する、と提案した(こと)。

(このような、およそ非人間的ともいえる行為や発言が堂々と(実際には表面に出ない形で)罷り通っている(こと)を、私たちは黙って見過す(こと)はできません。

職員を離反させる汚くない手口

しかし、考えてみると、これらは氷山の一角にすぎません。K校長が着任して以来、特にこの一年間、私たちの職場ではいやなことが次々と起(こ)り、明るく生き生きとしていた雰囲気(きづな)がすっかりなくなってしまう(こと)しました。それもこれも、職員を校長室に呼び出しては「あなたの(こと)を他人(ひと)は(こう)言(い)ってるよ」という、あの汚(きた)ないやり口(くち)によってもたらされた(こと)なのです。今では、職員同士でさぞ疑心暗鬼(ぎしんあんき)になり、「物言(ものごと)えば唇寒(くちばり)し」という状態(じょうたい)におかれています。

のではないのでしょうか。

もう泣き寝入りはしない。

(この一年間、私たちは、はっきり言(い)って(こう)した校長のやり方(かた)に対して泣き寝入り(なきねいり)して(きた)と言(い)っていい(こと)でしょう。労働者(ろうどう者)はひとりひとり(は)とても弱い(こと)です。しかし、団結(だんけつ)すれば(こ)とも強く(なる)もの(こと)です。い(い)さ(い)さ(か)遅(お)れば(せ)の感(かん)も(あ)りますが、私(わたし)たちはこの「共闘(きどう)会議(かいぎ)」を軸(しき)として、労働者(ろうどう者)の団結力(だんけつりき)の強(つよ)さを示(し)し、失(う)われた阪本(さかもと)の職場(じやうば)の明(あ)る(こと)を取り戻(もど)して(い)きたい(こと)と思(おも)います。その(ため)には、私(わたし)たちは、K校長(けいりやう)が行(い)ってきた(こと)を(ま)まの言(い)動(どう)を(内)(外)(に)明(あ)らかに(し)る(こと)を(辞(し)さ)ない(こと)も(り)です。

みなさん、明(あ)る(こと)い(い)阪本(さかもと)をつくる(ため)に(共)に(が)んばり(ま)しょう。

一九七九年一月八日

阪本世直し共闘会議

代表責任者 酒井雅親・N

連載

世直し共闘

(第二回)

酒井雅親



6 「黙って引き下がるのか。」

ヒラの中にある、一九七八年の年末にあったK校長の現業職員に対する「問題発言」とは、次のようなものである。

① 六〇歳を超えた者に対し、「あなた方は昼休み時間に主事室で寝ているでしょう。寝なければならぬということは、身体が疲れ切っているという事です。そつまでして勤めていただく必要はありません。この際、お辞めになったらどうですか。」

——どこでもそつだと思つが、現業職員は教職員より四五分早く出勤している。その分、昼休みの休憩をとる

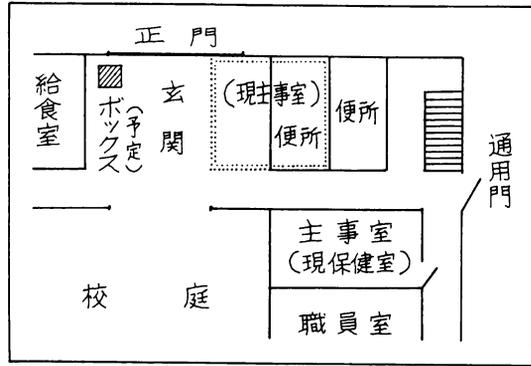
権利がある。休憩時間は、「使用者は、自由にこれを用させなければならぬ」(労基法34条)ものなのである。寝ようが、職場外に出ようが、自由である。現に、拘束時間の外に休憩時間を出している教職員の場合は、休憩時間に職場を離れていると同じことになっている。校長の発言は、こつした使用者としての常識を逸脱したものであった。

② 「お茶を飲む時間が長すぎる。先生方がそつ言っている」というのは、私があとで調べたが、だれもそんな陰口をたたいた人はいなかった。いつも使う校長の職員を離反させる手口である。

③ 「正門を開け、ボックスみたいなものを置いて、

主事に交代で受付(門番)をさせる」という校長の提案は、以下のようなものである。

下図のように、当時の阪本小の主事室は正門から離れており、したがって来客があっても直接対応ができない状態にあったため、正門は終始閉じたままで、通用門を開けていた。



◇ ◇

校長との「友好的な話し合い」(教頭)を終えて帰ってきた現業職員らは、「仕方がないかなあ」とすっかり弱気になっていた。学童擁護の一人も「あんなにまで言

われて働く気はしない」と、退職願を書き始めていた。学校に勤め出して初めてのことであるが、私は、そうした彼等を怒鳴りつけてしまった。

「こんなひどいことを言われて、黙って引き下がるのか、あなた方のこれまでの団結はいったいどこへ行ってしまったのだ！」。

7 危うし、「共闘会議」



一九七九年一月八日付のビラが区内の学校に入ったのは、実は、その日ではない。三日後の十一日である。この間、事態は思わぬ方向へと展開した。

始業式前日の一月七日、私は出勤してビラを印刷していた。正月に作ったものである。できあがったビラを主事室に一枚持って行き、「明日から始めるからね」と、日直で来ていた主事に見せた。いびられた都教組組合員の協力が得られなかったため、残念ながら彼等のことを一言もビラに書くことはできなかった。それでも、現業

職員との意思統一は暮れにきっちりやっておいたので、反撃の姿勢が固まった主事の表情は明るかった。

退職願を書こうとした巨主事が「酒井さん、鞍馬天狗みたいだね」と私を冷やかした。「正義の味方」という意味だが、「鞍馬天狗」とは古い。第一、おれは馬になど乗れはしない」。

ところが、翌日からの準備のためこの日出勤していた教務主任のCが、お茶を飲み立ち寄った際、このピラを見てしまった。彼は、ひとしきり世間話をした後、じっと眼を離さなかったそのピラを驚掴みにし、「これちよっと貸して下さい」と言うやいなや、脱兎のごとく学校を飛び出した。

K校長が本性を表して以来、一貫して校長の「腰巾着」を任じていたC(のちに港区の校長となり、本年三月退職)が向かうはもちろん文京区本郷にあるK宅――。

Cは教頭の年間要員であった。目前に迫った「出世」を逃してはならじと、彼は御注進に走った。

◇

◇



一月八日。前日のC教諭の言動が早くも流れていて、職場は朝から不穏な空気に包まれていた。都教組組合員のひとりには「いよいよやるのね」と言いながらも、困惑の表情を隠し切れなかった。酒井さんはいいかもしれないけど、あとでいじめられるのはあたしたちだ……。

朝の打ち合わせ直前に、私はピラをまいた。一瞬にして静寂が職員室を支配した。教頭が始業式の段取りを確認しようとしているのに、だれもが下を向いたままだ。K校長の顔もこわばっている。重苦しい時間が流れる。結局、みな押し黙ったまま職員朝会は終わった。

始業式終了後、教頭が私のところへやってきた。「校長先生が酒井さんと話し合いをしたいとおっしゃってます。ついては、ピラを交換便に入れるのをそれまで待っていただけませんか」。

「闘い」の主目標は校長の悪巧みをやめさせることにある。単に外に向かって宣伝することが目的ではない、とこの時点で私は判断をした。OKをS教頭に伝え、交渉は今日の四時からと決まった。

三時半、出勤してきた警備主事のNに今までのことを話した。とたんに、Nが「なんでビラを止めたんだ、」と、烈火のごとく怒り出した。

Nは、私と同じ世代。ふだんは物静かな人であったが、現業の問題に関しては区職労の執行部（社会党系が主流）に不満を持っているらしく、「事務の連中は現業のことが分かつたらん」と、時々漏らしていた。暮れの意思統一の場では「世直し共闘」とは、名前がいいね」と、快く代表責任者を引き受けてくれた人である。

その二人が、ビラの取り扱いをめぐって激しい口論となった。Nの言い分はこうである。

年末にあった校長の現業職員に対する「問題発言」は単に校長の資質の問題に帰すべき性格のものではない。六〇歳を超えた者に対するいやがらせにしても、勧奨に名を借りた高令者切り捨て策の一環としてなされた悪辣な肩叩きである。玄関にボックスを置く問題も、用務・学童擁護はもちろん、給食の作業が終わったら調理士まで座らせよつと、こののであるから、これは職種の統廃合

につながる重大事だ。総じて校長の言動は現業に対する合理化攻撃と捉えるべきであり、したがって広く仲間へ訴えながら闘わねばならない。ビラの対外配布を止めるいささかの理由もない。

私は反論した。名は連ねていないが、「共闘会議」は教員も含めた全職種一体の職場闘争組織として出発したはずであり、当面の敵は校長だ。したがって、校長に反省の意思があるのなら、戦術としてビラの配布を自粛することだってあり得る。仲間へ報告するにしても、校長をやった後の勝利報告でいいではないか

双方が譲らなかつた。もう時間がない。やむなく私は交渉を明後日まで延期すると教頭に通告した。

◇

◇



二日後の一月十日。再度二人は話し合ったが、折り合いはつかず、Nは校長交渉への出席を拒否した。

約束の四時。私は宮本武蔵よろしくわざと十分遅れて職員室を出た。廊下でテープレコーダーのスイッチを入れ、交渉会場の図書室のドアを開けた。